資　料	安 全 対 策

①まずは予防から･･･服装について考えよう

・雨を防ぐことは<u>体温低下を防ぐ</u>ということ。本降りになる前に着用する。
　※　透湿性防水素材(ゴアテックス等)が理想的。

②虫に刺されたら

【蚊・アブ・ブユ】

ヒトスジシマカ

小さな水域で８～９月頃
発生する

アブ

７～８月頃出現し，主に
昼間に吸血する

ブユ

吸血行動は朝夕や曇りの
日に特に活発になる

応　急　処　置

①抗ヒスタミン軟膏か，副腎皮質ホルモン含有軟膏を塗る。
②腫れやかゆみが強いときには，水で冷やすと良い。

【マダニ】

写真の著作権は
未確認

右が吸血前、左が吸血後。

野山の草や笹の中で付きやすい

応　急　処　置

<u>※外の活動から戻ったら，体や衣服にダニが付いていないか確認すること</u>

①ダニを見つけても無理に取ろうとしない。細菌感染症（ライム病等）の心配もあるので，
　医療機関で駆除する。
②腫れやかゆみが強いときには，水で冷やす。

【ハチ類】

クロスズメバチ

黄色の横帯が数本入っている。「ジバチ」とも呼ばれ，攻撃性はさほど強くない。

キイロスズメバチ

体長約１７～２４㎜。体色は黒いが黄紋が多く，飛んでくるときも黄色に見える。攻撃性、毒性ともに強い。

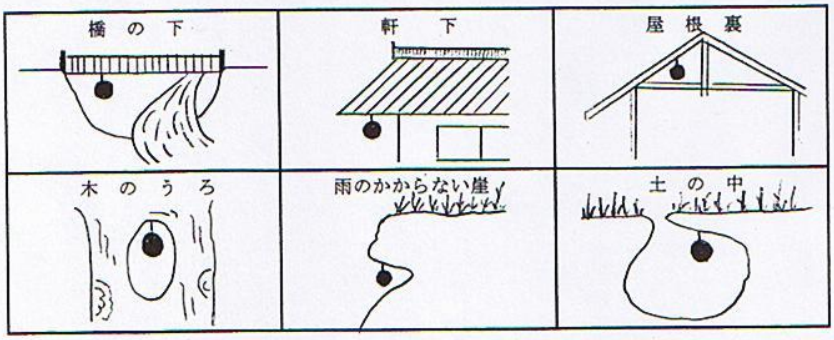
オオスズメバチ

体長約２７～４０㎜。日本最大種のスズメバチで，女王バチの体長は４５㎜にまでなる。橙色の体に黒い黄紋がある。頭部は大きく，咬む力も強い。攻撃性，毒性ともに強い。刺されるとショックで死に至ることもある。

ハチに刺されないために

ハチの巣に近づかないことが第一。ハチの巣を見つけたら静かにその場から立ち去ること。万が一，ハチが飛んできたら，びっくりして逃げ回ったり，棒や帽子で追い払おうとしないで，できるだけ体を低くしてその場から逃げる。ハチは，頭髪や瞳など，体の黒い部分をねらうことが多いので，目や頭部を保護することも忘れない。

スズメバチが巣を作りやすいところ



【応急処置のしかた】

①刺されたところをよく見て，針が残っているようなら指ではじき飛ばして取る。針には毒の袋がついているので，つまんで押し出そうとすると逆に毒が体内に入ることになる。
②（近くにあれば）ポイズン・リムーバーで毒を吸い出す。
③ハチの毒は水に溶けやすいので，刺された箇所を石けんと水でよく洗い流す。
④抗ヒスタミン軟膏か，副腎皮質ホルモン含有軟膏を塗り，清潔なガーゼを当てる。
⑤ガーゼを当てたまま氷等で冷やす。(痛みの軽減)
⑥腫れがひどく，痛みが激しい場合や，ショック症状や吐き気，動悸，じんましんなどの症状がある場合には，速やかに医療機関で受診する。

アナフィラキシー・ショック

野生の生物の中でも，最も危険なのがスズメバチ類。毎年死亡例が報告されている。その被害のほとんどが「アナフィラキシー・ショック」と呼ばれるショック症状によるもの。

このようなハチ毒に対するアナフィラキシー（特異過敏症）の人は，１０人に１人の割合でいるとされ，１度ハチに刺されると，その毒に反応する抗体ができてしまい，２度目以後にアレルギー反応を引き起こす。

ハチに刺されたときに嘔吐，下痢，発熱，全身浮腫，チアノーゼなどのアレルギー反応が現れた場合は，ハチ毒に対するアナフィラキシーの可能性が高い。兆候が見えたら一刻も早く医療機関での処置が必要である。

なお，アナフィラキシー・ショックは病院の皮膚科で調べてもらうことができる。１度刺されている人，体質的にアレルギー反応が心配される人は，検査を受けた方がよい。

③ヘビに咬まれたら

【応急処置のしかた】

① 咬まれたショックで，症状が悪化したり死亡することがある。精神的なショックを除くように元気づける。
② 動きまわると毒が早く全身に広がるので，安静にする。咬まれた部分は，心臓より低く保つ。
③ 毒が全身にまわるのを少しでもくい止めるために，咬まれた部分より少し心臓に近い部分を軽く縛る。
④ 咬まれた部分の周囲を圧迫して毒を排出させる。
⑤ 傷口を水またはタンニン酸を含むお茶などで洗浄する。消毒後，清潔なガーゼを当てる。
⑥ 応急処置が済み次第，早急に医療機関で受診する。医療機関への搬送の途中は，ショックの予防に気を配り，保温と元気づけを行う。水を欲しがればどんどん与えて肝臓の解毒作用を助け，尿として体外へ排出させる。

マムシ

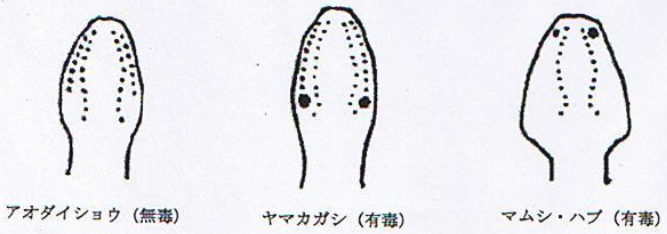
ほぼ日本全土に分布し，全長４５～７０㎝の小型の毒蛇。体色には変異が多いが，背面は灰褐色ないし暗褐色で，黒褐色銭形斑紋をそなえる。目は比較的大きく，瞳孔は縦型。

出血毒を主成分とした毒は強いが，普通咬傷により注入される毒量が少ないため，毎年咬傷事故が多発するわりには致命率は低い。

平地にも山地にも棲息し，水辺，湿度の高い竹やぶ，山間の水田付近などに多いが，比較的乾燥した耕地や河原にも見られる。

咬まれたときの牙の痕

＊太い点の部分が毒牙の部分。傷口の歯型から咬んだ蛇が有毒か無毒か判断できる。



頚部からの有害物質が入ったときの処置

（目）

①目にかなり強い刺激があり，痛みも激しいが，できるだけ目をこすらないようにする。

②きれいな水で目をよく洗う。

③できるだけ早く眼科医の治療を受ける。

（口）

①つばを飲み込まないようにする。

②きれいな水で，何回も口をすすぐ。（水を飲み込まないように注意する）

③水を大量に飲み，嘔吐して食道や胃に入った有害物質を出す。

④できるだけ早く医師の治療を受ける。

ヤマカガシの毒による症状

ヤマカガシの後牙にかまれた場合，局所の痛みや腫れはないが，牙痕からの出血が止まらない。その他頭痛，吐き気，リンパ節の腫れ，歯ぐきからの出血，血尿，全身に皮下出血や痛みなどの症状が出る場合が多い。

（※参考）

アカハライモリとニホンアマガエル

アカハライモリ

体長１０㎝前後。「ニホンイモリ」とも呼ばれる。背面は黒褐色，腹面は赤又はオレンジ色で，不規則なな黒斑紋が点在する。耳線や皮膚線からフグ毒と同じテトロドトキシンを分泌する。素手で触ったぐらいでは何の害もないが，その手で目や口に触れると激しい痛みを感じる。触った場合は，流水でよく手を洗うことが大切。

ニホンアマガエル

体長約２～４㎝前後。メスの体が大きい。背面は鮮やかな黄緑色で腹部は白い。茶系のものもいて，周囲の環境に合わせて体色を巧みに変化させることができる。あし先に吸盤を持つ。雨が近づくとよく鳴くことから「天気予報カエル」として知られている。皮膚線から刺激性の毒液を出す。手で直接捕獲しないことが大切。

④クマに遭（あ）わないようにするには？

★１．まず，クマのことをよく知る。

冬，クマは木や岩などの下の穴で「冬ごもり」をするが，爬虫類などの「冬眠」とは違い，完全に眠っているわけではなく，体温はあまり下がらない。中には，冬ごもりをせずに歩き回るクマもいるといわれている。

春，冬ごもりから目覚めたクマは，芽吹いた木々の芽や草の葉を食べるために動き回る。また，母グマは冬ごもり中に子どもを産んでいるため，雄よりも少し遅れて穴から出てくるが，子連れということから，より危険な状態といえる。人間の方も山菜採りに夢中になるなどして，クマの生息地に知らず知らずのうちに足を踏み入れ，クマの気配に気づかないままでいることがあり，注意が必要である。

夏は緑豊かな季節であるが，ドングリなどの木の実はまだ熟しておらず，クマにとっては以外に食べ物が少ない時期である。アリのような昆虫やキイチゴ類などを食べてしのいでいるが，ゴミにつられて人間のいるところまで出てくることもある。

秋のクマは山野を活発に歩き回り，ブナやミズナラ，クリなどの木の実を大量に食べ，冬ごもりに備えて体に脂肪を蓄える。人間も，紅葉狩りやキノコ狩りで山野に分け入る機会が多いので，注意が必要である。山の木の実が不作だった年は，作物や柿の実などを食べに人里に下りてくることがある。芋煮会などの残飯が狙われることもあるので，後片付けをしっかりし，クマをおびき出すことのないようにすべきである。

最近では，林業の後継者不足で里山が荒れ，山と里との境界がなくなったことから，年間を通じてクマの出没件数が増加している。

以下に現在一般的にいわれているクマの予防策や対処方法を紹介するが，クマに対しては「これが絶対」というものはない。我々人間の方も自然に対して謙虚な気持ちを持ち，残飯や空き缶等を捨てないなど，マナーを守っていくことがクマとの共存のために大切である。

★２．一番大切なこと・・・クマに遭わない工夫をする

当たり前の話ではあるが，クマに遭わなければ被害に遭うこともない。オオカミが絶滅している日本では，クマが唯一の野生の猛獣である。出会うのは動物園だけにしたいもの。

コメントの追加 [O1]: イノシシも猛獣

① 地元の関係諸機関（役所や警察，ビジターセンター，自然の家など）から最新のクマの出没情報を手に入れ、危険な場所には近づかない。

② ブナやミズナラなどの落葉広葉樹林帯（秋に葉を落とす木が生えている所　※）では特に注意。（クマは春は若芽、秋はドングリを食べる）※　泉ケ岳も該当する

③ クマは聴覚（耳のはたらき）が発達しているため，鈴や笛，ラジオなど，大きな音の出るもので人間がいることを知らせ，クマの方から遠ざかってもらう。（爆竹は短時間しか効果がない）野外活動の際は単独行動を避け，グループで会話しながら行動するとよい。

④ クマの足跡や爪痕、糞などを見つけたら引き返す。声や音のする方に近づかない。

★３．万が一出会ってしまったら・・・慌てず，騒がず，まず落ち着くこと

自然の中で活動するとき，１００％クマに出会わない・襲われないということはあり得ない。出会ったときに備えて，どうしたらよいかを知っておくことが大切である。

（1）クマとの距離が離れていて，人間がいることに気づかれていない場合

○　その場から静かに立ち去る。

※　以外に動きは素早く，全力で走ると時速40km（100m走７秒台！）にもなり，人間の足ではとても逃げ切れない。木登りや泳ぎも得意だということを忘れずに。油断は禁物。

（2）突然間近でクマと出会った場合

①　敵ではないことをクマに伝えるため，動かずにじっとしている。

②　クマの方が先に逃げるまで静かに待つ。(逃げてくれないとき･･･→★４．)

③　**絶対にやってはいけないこと５つ**（クマを刺激して攻撃を誘発させる可能性が高い人間の行動）

Ⅰ.急に立ち上がる

Ⅱ.大声で叫んだり大きな音で威嚇（おどすこと）したりする

Ⅲ.物を投げつける

Ⅳ.背中を見せて走って逃げることは危険（クマは反射的に追いかけてくる）

Ⅴ.子グマだからといって不用意に近づくのは危険（近くに必ず母グマがいる）

★４．それでも，不幸にしてクマが攻撃してきたら・・・

クマが攻撃をやめて立ち去るのを待つ

①　荷物や衣服をクマと人間の間に置き(投げつけないこと)，クマの関心が物に移った隙に静かに逃げる。

※　物よりも人間の方に興味があるクマもいるので，万全とはいえない。

②　攻撃されたら，うつ伏せで体を丸くして（顔面や腹部を保護），腕を首筋に回す（後頭部から頸椎を保護）。

※　クマは最初の一撃で立ち去ることが多いといわれているので，ダメージの少ない体勢をとる。

※　クマは好奇心が強いので，死んだふりをすると噛まれたり引っ掻かれたりすることがある。

④　ポンチョやビニールシート，傘を開いて助かった例もあるが，クマに出会ったとき偶然手に持っていなければ使えない。

⑤　鉈(なた)などで攻撃して助かった例もあるが，普通の人はやめた方がよい。(手負いのクマは凶暴になる場合もある)

ツキノワグマ
（本州以南に生息）

⑤有害植物

【触れてはいけない植物の例】

ヤマウルシ

山地に生える落葉小高木。アカマツ林や湿原の周辺に多い。葉は長さ５～１２㎝で互生する。
葉柄は赤紫色。花期は，５～６月。黄緑色の花を集めた花序。９月頃から紅葉して真っ赤になる。

ツタウルシ

写真の著作権は未確認

つる性で，木や岩にからみついて伸びる。花期は６～７月黄緑色の小さな五弁花。葉は三出複葉で互生する。秋にはいち早く紅葉して美しい。

ウルシ科の植物に触れると・・・

ウルシ科植物には，ウルシオールという有毒物質が含まれ，皮膚に触れるとかぶれる（ツタウルシはラッフールという成分でかぶれる）。その程度は個人差が大きく，ひどい場合は木の下を通っただけでかぶれる。

応急処置

① 石けん水で接触した部分をよく洗い流す。
② かゆみが強い場合は，抗ヒスタミン等を塗り，冷やす。

【野外で植物を食べることについて】

植物の中には有毒なものが数多くある。食べると死に至るものもあるため，十分に知識や経験のある人を除いて，野山でむやみに植物の実や葉，キノコ等を食べることは絶対にやめるべきである。

(例)

食べられる「ニリンソウ」と猛毒の「トリカブト」は葉の特徴がそっくりで，花が咲いていないと見分けるのが非常に難しい。しかも同じ場所に隣り合っていることがあるため，なおさら危険である。(どちらも泉ケ岳に自生している)